▲東京港区青山墓地にあるゴットフリード・ワグネルの墓

Dr. ワグネル

東京・港区にある青山墓地の一角に、有田と深いかかわりを持っていたゴットフリード・ワグネルがひっそりと眠っています。ドイツ生まれの彼は、異国の地でどのような日々を過ごしたのでしょうか。

彼は明治元年（1868）、3月にフランスのマルセイユを出発し、同年5月に長崎に着きました。有田に滞在したのは明治3年（1870）の4月から8月までの4か月です。この間、日本で初めての石炭窯での焼成方法や、酸化コバルトによる絵付けの方法などを皿山の人々に教えました。

現在、彼をしのばせるものは、町の中に形としては残っていません。しかし、そのころ作られた焼き物などから、明治の初め、まだ世の中には十分に江戸時代が息づいていたころ、皿山にやって来たこの外国人指導者を前に、胸はずませて新しい技術を吸収していった皿山びとの姿を思い浮かべることはできます。

（写真提供　吉田章一郎氏）

有田町歴史民俗資料館

皿山びとの歌 No.8

紙に記録される以外の歴史資料、それは石造物であったり、鐘のようなものであったりするのですが、これらの物言わぬ証人に私達から語りかけること、これが拓本です。今年度初めて８月の土曜日の昼下がり、２回にわたって拓本と裏打ちの教室を開きました。受講されたのは延べ２２名。まず、館内で講師の先生のお話を聞き、いざ実習へ。真夏の炎天下という悪条件の中、ほとんどの人が初めての体験ながら、全員が実際に拓本作りをしました。２週間後にその紙を裏打ちしましたが、なかなかの出来栄えでした。

有田町教育委員会では、８月下旬から１０月上旬にかけて４か所の古窯跡を発掘調査しました。場所は戸杓の禅門谷一本松、禅門谷、白川の中白川、黒牟田の多々良の元窯跡です。今年の調査は町外の研究者が参加され、また道路の近くだったので町内からも大勢の見学者がありいつもより賑やかな発掘調査でした。

歴史を学ぶ意味、それは過去を知ることにより、これからの未来を見通すことが出来ることだと思います。有田町の宝ともいえる古窯跡です。これからも大事にしていきたいと思います。

ある日ある時

９月の中旬、佐賀女子短期大学の野口和子先生とご一緒に、皿山の食生活について聞き取り調査をしました。農業を中心とした佐賀県の中で、有田は焼き物を中心とした生産体系であるから、その食生活も、県内の他の地域とは異なるのではという先生の期待どおり、おもしろい話を聞くことが出来ました。その中の１つ、１２月に入ると商人の家では“師走川（しわすがわ）に落ちらんように”と、１２月１日の日に塩断ちをし、赤飯を炊く風習があったそうです。また、窯焼きの家では２４日にこうじで作ったもの（例えば味噌・しょう油など）を使わない食事をしたそうですが、これは火事を出さないおまじないのようなものだったそうです。調査では多くの方たちにお世話になりました。また、お話を聞かせてください。

昨年に引き続き、今年も７月から９月まで６回にわたり古文書（こもんじょ）教室を開きました。テキストは「鳥の子帳」という佐賀藩の法律を読みました。受講されたのは延べ９５名。昨年から２年目という方や、今年初めてという方一緒の講義でした。「少々恥をかいたほうが上達しますよ」という先生の言葉通り、１人ずつ声を出して読む形式の授業の成果はてきめん。最終回ではほとんどの人がスラスラと読まれるようになりました。資料館では教室を終了した方々と毎月“古文書を読む会”を開いています。

▶昔の犯罪記録簿「科（とが）人帳」

◀学級園でできたさつまいもを食べる有田小学校の子供達（昭和18年12月18日、有田小学校資料室蔵）

前回では、戦局不利の日本の「起死回生の妙手」として、秘密兵器「ロケット式戦闘機」が考案された。この戦闘機の燃料製造装置を磁器製造することになり、有田の磁器メーカーもこの研究に参加する。ロケット式戦闘機の燃料製造装置に関することを㊙（ロケットのロに○でマルロと読む）とした。多数の犠牲者を出しながらも、日本最初のロケット式戦闘機は、わずか1年で正式テストまでこぎつけたのだった。

有田製 ロケット兵器

和久陶平氏が語る　海軍ロケット兵器の秘密 ＝下＝

《㊙に有田の主要メーカーが一致協力》

さて、有田の㊙の経過をたどってみると、このロケット燃料の特徴として、塵埃（じんあい）のような異物が入ると爆発するし、強酸性薬品なので、作業室には耐酸タイルを張りつめてチリひとつ留めないように清潔にし、製造装置は最高の耐酸性を有する物質でなければならないところから、海軍燃料廠（ねんりょうしょう）でテストをして「有田の磁器が最高」（武雄中山鉄工所女婿の片淵海軍技術中佐の報告）ということになった。

それで昭和19年にメーカー各社が、香蘭社2階の豪華な応接間（同社ではこれを「上等の間」と呼び、主賓の椅子は玉座の如し）に集められ、海軍監督官が見えて、

「ここで聞いたことは絶対に漏らさない」

ことを誓約させられたうえで、「最高機密に属する兵器、すなわちロケット燃料を製造する装置の製作可能な各工場は最大の協力をせよ」と命じられた。

その装置というのは耐酸性に秀れた磁器製の「電解槽」、「ろ過板」、「コック」、「貯蔵槽」、「耐酸タイル」などであって、小倉の東洋陶器、名古屋地区の日本碍子、日本陶器、伊奈製陶など日本の陶磁器メーカーの総力が結集され、有田では次の5社がこの仕事を引き受けることになった（五十音順、人名は各社の㊙担当責任者）。

有田製陶所（現・有田タイル㈱）
　和久良一、和久陶平
岩尾磁器工業㈱
　矢野三郎、岩尾熙（海軍技術中尉、名古屋駐在㊙監督官）
㈱工栄社
　前田幹三、田代保喜郎
㈲香蘭社
　深川龍敏、川内敬一、百田弥之助
山本火鉢
　山本頼一、山本哲郎

しかし当時の各社の役員は出征したり、その

◀香蘭社の「上等の間」と呼ばれた貴賓室（現在）ここで海軍監督官から、ロケット燃料を製造する装置の制作を命じられる

後亡くなられたりして、この㊙の事情を知っている現存者は岩尾熙、田代保喜郎、山本哲郎、和久陶平の４名だけになってしまった。

また当時は軍需工場でなければ、経営者も従業員も軍隊への召集や軍需工場への徴用（強制転職）が来るし、資材の入手も難しく、経営の継続が追々困難となりつつあった時代で、この㊙受注は航空機のような兵器並み、いやそれ以上に重視されて召集免除、徴用解除、資材の最優先配給などの特典も与えられたから５社は大助かりであった。

ついでに記すと、この㊙計画の全国の責任者は、海軍が貴田勝造少佐と、メーカーは名古屋の日本碍子。九州の責任者は、福岡海軍監督官事務所の藤島大佐、平島大佐、橋本栄一大尉、岩宮勇中尉に、メーカーは小倉の東洋陶器が選ばれた。

とにかくこの㊙磁器製品は、それまでに考えられなかったほどの精密さを要求され、特に大形の成形、焼成や仕上げが難しく、各社とも苦心惨憺（くしんさんたん）して海軍の要望に応えた。

結局我々の努力は実戦の役には立たなかったが、㊙で得た大きな収穫は、製陶技術の著しい向上と共に、有田であのように各メーカーが慾得（よくとく）なしで誠心誠意協力し合ったのは、後にも先にも例がなく、銘記すべきことである。

≪血気の士官、女子挺身隊に突撃≫

㊙磁器製作を監督指導していた海軍の若くてダンディーな某士官は、有田に泊り込みで、熱心に指導してくれたが、宿泊施設などないので、某工場の寮に泊ってもらった。

なかなかマメな性格で、一夜女子挺身隊の宿舎に忍び込んで大騒動。しかし関係者らの努力で大事に到らず無事に解決した。

我々は、これを「ハワイ大空襲」と称して笑い飛ばしてしていた。

≪福岡大空襲に逃げまどう≫

㊙の会議は再々行なわれたが、忘れられないのは、昭和20年６月20日の福岡海軍監督官事務所での会議である。

「当日は早朝から開催するから前日の夜から市内に泊れ」、という指示で、４社の担当者すなわち

有田製陶＝和久良一、和久陶平
岩尾磁器＝矢野三郎
工 栄 社＝田代保喜郎
香 蘭 社＝百田弥之助

の５名は19日に市内外の各所に分宿した。

その夜、福岡市はＢ29(239機)の大空襲を受け、市街の大半が焼失。953名の死者とおびただしい負傷者が出た。

市内に泊ったのは田代氏と和久兄弟の３名で百田、矢野両氏は幸運にも市外であった。

この市内組の３名は、ザーッと豪雨の如く降る油脂焼夷弾（ゆししょういだん）と猛火の中を、田代氏は那珂川に飛び込み、和久兄弟は右往左往の揚句、東公園へ逃げ、共に九死に一生を得て、早朝監督官事務所にたどり着いた。

市外組の両氏は「イヤー昨夜は大花火のようで、とても奇麗だった」などと高見の見物。非国民的にして無情冷酷なセリフをヌカしてケシカラン！

監督官事務所では、朝と昼に御好意の弁当が出て感激したが、「帰ったら米を送れ」といわれてガッカリ。

この時の泊り賃と汽車賃は確か払わずにウヤムヤになったが、その夜、上有田駅に着いたら、多勢の出迎えに驚いた。

これは社員や家族がラジオで空襲のニュースを聞き、「各社の役員さんたちは全滅したのではないか」と蒼くなってのことであった。

しかし全員無事帰還で、駅頭感激のバンザイ。

なお、田代氏は被害甚大のため、あとで立派な革の軍靴と純綿の靴下（何でも当時普通には手にはいらぬ貴重品）の特配にありついてモーケタ由。

≪終戦時の混乱≫

突然の終戦は、いろいろな騒ぎを巻き起こしたが、数日して海軍首席監督官の藤島大佐が来有、最初と同じ香蘭社のいわゆる「上等の間」で、「皆さんには長い間無理な命令ばかりして御迷惑をおかけしました。心からおわび致します。㊙関係の製品や書類は進駐軍の目に止まれば、どんな処罰を受けるか予想されないので、すべて粉砕焼却し処分して下さい」と、今までとは打って変わってご丁寧な挨拶をされた。

それから数日は各社とも大騒ぎとなり、硬い磁器は容易に割れず怪我人が出たり、山のような書類はなかなか燃えずに往生した。

後で考えると無駄な処置であったが、当時は混乱していて「㊙がバレると各社のエライさんたちは銃殺だ」とのデマも飛んだくらいで、無理もなかった。

それよりも印象深かったのは、監督官の堂々たる大佐がよく見ると位階を示す襟章や腰の短剣もなく、一遍に老け込み、肩を落としてトボトボと帰られる後ろ姿は如何にも淋しそうで、見送る我々は、この時始めて「負けいくさ」を実感し、目頭が熱くなった。

≪懲深く㊙でもうける≫

㊙製品で終戦後いささかトクをしたのは山本火鉢の「貯槽」と、有田製陶所の「タイル」だけだった。どちらも幾らか在庫していたのを正式に払下げを受け、「貯槽」は釉薬溜めや農家の穀物入れに提供したり化学工場の貯槽に売れたり、「タイル」は進駐軍宿舎建築などに需要が出て、少しばかりのカネモーケになった。

≪代金を復員省からモギ取る≫

終戦後は仕事もなく、それでも呑気（のんき）で金の心配は余りしなかった。陸海軍省は復員省に変り、㊙の売掛代金の受領はほとんど諦めていたが、岩尾磁器の矢野専務が、どこでどう話を付けたのか、旧海軍の飛行機で雁の巣飛行場（福岡市）から上京し、㊙代金支払いの交渉をすることになった。我々の大きな期待を双肩に担って勇躍？飛び立ち、遂に復員省にウンと言わせて凱旋したのであった。

しかもその年末、今度は元海軍㊙監督官・岩尾熙殿（実際にカネを持ってきてくれたので特に敬称を奉る）が、５社全部の代金数十万円也（今の十数億円？）を持って帰り、各社に渡してもらった。

かくして終戦までの１年有余にわたる　作戦は大団円を告げたのであった。

この間各社は、この様に見事に協力し合ったが、その矢野氏や川内、深川、前田、百田、山本（頼）、和久（良）の７氏も今は亡く、感慨無量である。

心から御冥福を祈る。

和久陶平（わく・とうへい）氏

プロフィール

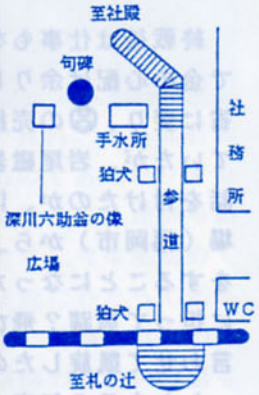
大正３年、有田生まれ。
旧制佐賀中学～関西学院大学卒業後、帰郷し有田製陶所に入る。
現在、窯大・県技術ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ。

6 ＊ 皿山びとの歌

街角の歴史

陶山神社の

芭蕉句碑



現在、町内には芭蕉句碑が３基確認されています。その内、黒牟田と南山天満宮の句碑についてはこれまで紹介してきました（皿山びとの歌　No1,No4）。今回はその３つ目の陶山神社の句碑について触れてみたいと思います。

陶山神社の境内に入ると参道脇に陶板の説明板が目にとまります。その傍らにある古びた石碑が芭蕉句碑です。月見塚とも呼ばれ、その石肌には、

「雲折り折り人を休むる月見かな」

と、一句彫り刻まれています。芭蕉４２歳、貞享２年（1685）の秋の句です。有田の人々がこの境内で月見の宴を催し、雲が月にかかる度にこの句を口ずさんだ姿が目に浮かびます。

また、この句碑の建立は明和９年（1772）で現在、佐賀県下で確認されている句碑の中では最古のものとされています。

旧制高等学校の寮歌の一節に「岩を抱きて野に歌う芭蕉の寂を喜ばず」とあります。原作は与謝野鉄幹ですが、進取精神が旺盛だった寮生達は芭蕉の寂をよしとしなかったのでしょう。しかし、裏を返せば日本人の嗜好の根底に抗いきれないものがあるように思えます。

町内にはまだまだ他にも芭蕉句碑が眠っているかもしれません。それらの眠りが覚めたときまた芭蕉についてペンを執りたいと思います。

秋のひとときでした。

子供のための有田町史「皿山なぜなぜ」を好評発売中

このほど、有田町公民館との協力で、子供たちを対象とした郷土史『皿山なぜなぜ－有田陶磁史を歩く』を出版しました。町内各方面の方方に原稿を執筆していただき、まさに町の人の手によって作られた冊子です。

内容は、町を歩きながら５０の質問に答える形式です。例えば「陶石はなくならないの？」「皿山に武士がいたの？」、「有田で金もとれたの？」など、日ごろ疑問に思うことがらについての説明がなされています。

この一冊を完全にマスターすれば、あなたはもう本物の“有田皿山びと”です。ご一読をおすすめします。

定　　価　　￥700
販売場所　　有田町歴史民俗資料館
　　有田町公民館　　など

濃み筆のつぶやき

紅葉を楽しむ季節となりました。資料館のモミジは町内でも１、２を競う見事さですが、ことに夕日にはえるモミジは、一瞬言葉を失ってしまうほどです。改めて自然の織り成す風景に見とれてしまいます。

この季節になると、全国の子供たちから有田焼のことについての質問が届きます。少しでも有田焼のことを知ってもらおう（その裏には大きくなったら有田に来て、焼き物を買ってもらおうという思いがなきにしもあらずですが）とせっせと返事を書きます。今年は力強い味方、『皿山なぜなぜ』を大いに宣伝しながら書こうと思います。（葉）

有田町歴史民俗資料館報
皿山びとの歌　No.8
発行年月日 ＊ 平成元年11月１日
編集・発行 ＊ 有田町歴史民俗資料館
〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955－43－2678